

書評

アルバート・O・ハーシュマンの伝記を読む

Following the Odyssey of Albert O. Hirschman

久松佳彰*

【要約】

The biography of Albert O. Hirschman written by Jeremy Adelman reveals the worldly philosopher's life from his three-time military experience, to establishing his own strategy of economic development based on his experience in Colombia, and, to prolific research activities from 1960s. The book also vividly illustrates his intellectual production process. The two main pillars of his research production are *petites idées* and doubt in action. The former allows him to start two of his main works. The latter is the base of both his intellectual possibilism and his support to Latin American think tanks thriving under military dictatorship. Through this book, readers can follow the life of the Worldly Philosopher, the one and only navigator in the intellectual siren of 20th century.

1. はじめに

ドイツ・ベルリンに生まれ米国で活躍した社会学者アルバート・O・ハーシュマン (Albert O. Hirschman, 1915-2012) についての伝記の決定版がプリンストン大学歴史学教授ジェレミー・アーデルマンによってプリンストン大学出版会から2013年4月に出版された。題は *Worldly Philosopher: The Odyssey of Albert O. Hirschman* である¹⁾。訳せば、『世俗の思想家：アルバート・O・ハーシュマンの大航海』ということになるだろうか。この題はもちろん、著者アーデルマンが明かしているようにロバート・ハイルブローナーの名著『入門経済思想史 世俗の思想家たち』を意識している²⁾。すなわち、ハイルブローナーが紹介するアダム・スミス、マルクス、ケインズ、シュンペーターという経済学者の系譜にハーシュマンが位置づけられるというのであろう。

本書の出版と共に、米国では知識人たちが有力雑誌でこぞって紹介した。シカゴ大学法学部教授キャス・サンスティーン (『実践 行動経済学』の共著者) がニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス (2013年5月23日) に『我々の時代の比類ない思想家』という題で紹介したのを皮切りに、文筆家マルコム・グラッドウェル (『天才! 成功する人々の法則』) がニューヨーカー (2013年6

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

月13日)に『疑問という恩寵』という題で紹介した。そして、ハーバード・ビジネス・レビュー編集人ジャスティン・フォックス(『合理的市場という神話』)もニューヨークタイムス(2013年7月19日)で『退出、抗議』という題で紹介した。その他、経済学者で著名ブロガーであるジョージ・メイソン大学教授タイラー・コーエンは自らのブログ Marginal Revolution で好意的な紹介を掲載し、英国経済紙ファイナンシャル・タイムズ内 Alphachat は2013年の最良経済書の一つに選んでいる。

これだけ広く紹介されている本であれば、このような場において更に紹介する追加的価値は小さいかもしれない。しかし、この書評では、三つの新しい点を意識している。第一に、本書が大著(760頁)であるということをふまえ、日本語での簡単な粗筋を掲載すれば、ハーシュマンをあまり知らない日本語を母語とする読者には有益であろう。第二に、ハーシュマンが活躍した時期は経済学が制度化された時期に当たっており、その点を明示的にして振り返ることは経済学史上から有益であろうと考える。第三に、私がラテンアメリカ経済を専門としており、その点から本書に新しい補助線を引くことも可能であろう。

以下の構成は次の通りである。第二節では、アーデルマンの著書に従って、ハーシュマンの人生を簡単に振り返る。第三節では、ハーシュマン独自の思考プロセスの特徴を押さえながら、経済学の体系化との関係、そして中南米研究への意義を議論したい。第四節は、結語である。

2. 内容紹介

アルバート・O・ハーシュマン (Albert Otto Hirschman) は、元々オットー・アルバート・ハーシュマン (Otto Albert Hirschmann) として1915年ベルリンに生まれた。アルバートを前にして、ハーシュマンの *n* を一つ取ったのは米国への入国の際であった³⁾。世俗的な中流上層ユダヤ人の家庭に生まれたハーシュマンは、プロイセン王国の宰相オットー・フォン・ビスマルク (Otto von Bismarck, 1815-1898) のオットーをとって名付けられた。父は医者であり、裕福な家庭に生まれた母は再婚であった。姉のウルスラ、妹のエヴァの三兄弟であった。9歳のときにフレンチ・ギムナジウムに入学し、人文学を中心とした教育を受ける。1927年には父とともにフランス・パリを訪問し、感銘を受けたという。1931年頃にはヘーゲル『精神病理学』、マルクス『資本論』、『共産党宣言』などを読書し、左翼運動にも関わる。そんな中、左翼運動のある講演でコンドラチェフ・サイクルについて説明を受け、経済学に関心を持つようになった⁴⁾。1932年1月29日にはフレンチ・ギムナジウムの卒業試験を受け、その論題はスピノザによる『人は、世界に対して笑っても泣いてもいけないのであり、理解しなければいけない』だったという⁵⁾。彼は無事に卒業し、ベルリン大学法学部で経済学を学ぶ一年生になる。ただし、一年弱の間に学んだ経済学は近代経済学ではなく古典派の経済学であったという⁶⁾。この時期、ナチス党は党勢を拡大し、18歳頃のハーシュマンも反ナチス運動に参加するようになる。1932年7月の選挙でナチスは第一党を占めることになる。1933年3月11日には父が死去し、ナチスの手が及びかかっていたハーシュマンはパリに出立した。

パリでは、家庭教師などをおこない生計を立てながら、パリ HEC 経営大学院 (École des hautes études commerciales de Paris) に入学する⁷⁾。経済学が学びたかったハーシュマンではあるが、周りのアドバイスを受け、将来の生計のことを考えて会計を選択し勉強したが、あまり興味

を持てず、そんな中で経済地理の授業には関心を示したという⁸⁾。1935年にはエウジェニオ・コロルニ (Eugenio Colorni) と親睦を深めることになる。コロルニとはベルリンですでに出会っていたが、イタリア・トリエステ出身の広い関心を持つ哲学者であるコロルニはやはりパリに来ていたハーシュマンの姉ウルスラと一時期は結婚することになる。1935年夏には姉ウルスラや妹エヴァと共にハーシュマンはコロルニとトリエステで共に過ごし、知的にコロルニから強い影響を受けることになる⁹⁾。

20歳のハーシュマンがコロルニから受けた知的影響は、二点でまとめることができる。第一は、「小さいアイデア (petites idées)」の重要性である。第二は、「疑問」(doubt)の重要性である。第一の「小さいアイデア」とは、『小さな知識の破片であり、世界の全知識を提供するものではなく、それでいて、ひょっとすると既存のイデオロギーが主張する全てを揺るがす可能性があるもの』と説明されている¹⁰⁾。そういう「小さいアイデア」をこの時期からハーシュマンは記録し保存するようになったという。このような「小さなアイデア」から一冊の本に至ったハーシュマンの代表例が、彼の主著の一つである『離脱・発言・忠誠 (Exit, Voice, and Loyalty)』のきっかけとなったナイジェリアの鉄道の経験であった。前著『開発計画の診断 (Development Projects Observed)』で訪問したナイジェリア国の鉄道は、トラック輸送との激しい競争があったにも関わらず、その非効率性が全く改善しなかった。ハーシュマンは経済学者としては、ライバルとの競争があれば効率性は改善するはずなのに、そうになっていなかったことが記憶に残ったのである。それはなぜだろうかという「小さいアイデア」が『離脱・発言・忠誠』での政治と経済をまたがる考察に繋がったのである。

もう一つの主著『情念の政治経済学 (The Passions and the Interests)』においても、そのきっかけとなったのは「小さなアイデア」であった。そのアイデアとは、彼が少なくとも20歳の頃から親しんでいたモンテスキューの『法の精神』の第4部第21編第20章における『熱情が邪悪な考えを自分に吹き込むのに対して、そうならないことに利益をもつ状態にあることは、人間にとって幸福なことである。』という一文である。この「小さなアイデア」からハーシュマンは思想史への探索を広げて、アダム・スミスの有名な「見えざる手」のテーゼ（個人の利己心は、市場の価格調整メカニズムを通じて、公共の利益を促進する）以前には、商業（経済的活動）を支持する政治的な議論（経済的利益があることによって政治的熱情を抑止するという商業活動を支持する議論）があったことを発見したのである。

もう一つの「疑い」(doubt)の重要性とはどういうことだろうか。疑いはたった一つの確かなものであると述べたコロルニは不確実性と比較して説明した¹¹⁾。不確実性とは、人が間違っているかもしれないと考えることである。疑いとは、自分が知らないということに確信していることである。不確実性は自分の確信を減らすが、疑問はそうではない。そして、疑いは人を動機づけると述べた。だから行動できるのだ。その意味でコロルニが若きハーシュマンに感銘を与えた言葉は「ハムレットが間違っていることを証明しよう (Prove Hamlet wrong)」というものだった¹²⁾。すなわち、ハムレットは疑問に囚われて行動することができなかった。疑問は大事だけれども、疑問を持ちながら行動しようという考え (doubt in action)こそが、コロルニがハーシュマンに呼びかけたマントラだったのである。後にハーシュマンが関わる三つの従軍、マルセイユで従事したユダヤ知識人の亡命支援、そして軍政下での中南米への知的支援の底には「ハムレットが間違っていることを証

明しよう」という行動指針があったに違いない。

このように20歳のハーシュマンがコロルニから受けた知的影響はその後のハーシュマンの知的基盤を形作っていくことになった。その後、20歳のハーシュマンは1935年にイギリス・ロンドンに奨学生として赴いた。この時、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)で初めて彼は念願の本格的な経済学の教育を受けることになる¹³⁾。しかし、彼は自分の好きな授業をいくつか受講しただけでLSEに本格的に入学したわけではなかった。この時期にはすでに経済学教育の制度化は進行しており、例えば、開発経済学の分野で1978年にノーベル経済学賞を受賞したアーサー・ルイスは1935年当時にLSEで学部学生であり、その後、博士課程で経済学を専攻した。これに比べると、留学生のハーシュマンは選択的に講義を受けたという。なかでもアバ・ラーナー(Abba Lerner)の経済学原論の講義を受け、また、バレット・ホエール(P. Barrett Whale)の下で国際経済学を学び、優れたフランス経済についての論文を書いたと言われる¹⁴⁾。同時に、ハーシュマンがロンドンに滞在していた1936年は、ケインズが『雇用・利子および貨幣の一般理論』を出版した年でもあった。ハーシュマンも『一般理論』を購入し、読んだと言われている¹⁵⁾。ハーシュマンがLSEで感銘を受けたのは、経済について議論が闘わされていることではなく、経済についてのアイデア、すなわち経済学について議論が闘わされていることだったという¹⁶⁾。LSEでは、ハーシュマンは国際経済学を中心に実証的な手法を学び、そして、経済学のアイデアについて議論を戦わすという点に関心を抱いたのだ。

ハーシュマンはLSEへの一年の留学が終わると、1936年6月にパリにもどり、そして7月から10月末までにスペイン内戦にカタロニアで参戦する¹⁷⁾。ファシズムに追われてドイツを去ったハーシュマンとしては何とかしたかったのだという。その後は、コロルニの住むトリエステに向かい、1937年から38年にかけてイタリアの人口や経済問題をトリエステ大学で学び、何本か論文を書き、トリエステ大学から学位を受ける¹⁸⁾。その後は、フランスにもどりイタリア経済への知識を生かして、1939年からソルボンヌ大学の経済社会研究所の経済研究雑誌にイタリア経済について寄稿し、収入を得ていた。この頃に国際連盟と関連してパリに在住して経済研究をおこなっていたニュージーランド人経済学者のジョン・ベル・コンドリフェ(Condliffe)に紹介されることになる。コンドリフェはハーシュマンにイタリア経済と貿易関係の分析を依頼し、その研究結果を高く評価した¹⁹⁾。

しかし、戦争の影はフランスにも忍び寄り、いよいよ1940年にフランスはドイツと戦争をすることになった。ハーシュマンはフランス軍に参加し従軍したが、敗戦とともに逃亡し、マルセイユまで変名で逃げ落ちた。このマルセイユで彼が参加したのはドイツ人を中心とするユダヤ系の知識人を米国に亡命させるというバリアン・フライ(Fry)のプロジェクトであった²⁰⁾。ドイツ語もフランス語もイタリア語も英語も堪能であったハーシュマンはフライの助手として活躍し、ハンナ・アーレント他、有名な知識人を何人も亡命させることに成功した²¹⁾。

戦火は欧州全土に拡大し、ハーシュマンも米国への移住を計画していたが、どうやって査証を取るかが難題であった。結局、米国に住むハーシュマンの従兄がその頃、カリフォルニア大学バークレー校に移っていたコンドリフェと接触し、コンドリフェが国務省とロックフェラー財団に連絡し、ロックフェラー財団から研究者としての留学の奨学金が出ることになり、それを元に査証が出た²²⁾。1940年の年末にマルセイユからスペイン経由でポルトガルのリスボンに行き、リスボンか

ら船に乗って、41年1月にニューヨークの対面にあるジャージー・シティの港から入国した。

入国審査でハーシュマンがおこなったのは、自分の名前を米国風にすることだった。まず、元々は Otto Albert だったのを Albert Otto に並び換えた²³⁾。そして、移民局の役人がハーシュマンの末尾に元々あった二つの n を一つ取ってしまい、彼は Albert Otto Hirschman として米国に入国することになった。ハーシュマンは、受入先のコンドリフェの在籍するカリフォルニア大学バークレー校に行く途中でシカゴ大学に立ち寄り、LSE 時代に教えを受けたラーナーを訪問して、自分の貿易と国際政治に関する研究アイデアについて相談したという²⁴⁾。ラーナーから後押しされて、バークレーではコンドリフェのチームでの共同プロジェクトとともに自分の研究を積極的に開始した。これが彼の最初の著作である『国力と外国貿易の構造 (National Power and the Structure of Foreign Trade)』(1945 年出版)に結実する。バークレーではこの他、公私両面で二つの大きな出来事があった。一つは、コンドリフェの研究チームには後にハーバード大学で教鞭をとったアレクサンダー・ガーシェンクロンが所属していて、彼と知り合いになったことである²⁵⁾。ガーシェンクロンは後にハーシュマンが連邦準備で勤務し始める時にも、そして、その後にコロンビア大学からハーバード大学に移籍する時にも大きな役割を果たすことになる。もう一つは、生涯の伴侶となるサラ (Sarah) と出会ったことである²⁶⁾。サラはユダヤ系のロシア・フランス人で、パリで生活した経験もあり、二人は 1941 年には結婚し新居を構えることになった。

1942 年 2 月にはハーシュマンは米軍に志願した²⁷⁾。同年には『国力と外国貿易の構造』を書きあげており、1943 年に生涯三度目の従軍で陸軍に入隊することになり、語学力が買われ、CIA の母体であった OSS に所属した。しばらく北アフリカにいた後、イタリアに進軍した。その後、軍事裁判の通訳としても働き、ドイツ軍の将校であるドストラー將軍の軍事裁判の通訳としての写真が今も残っている²⁸⁾。1944 年には長女カティアが誕生した。

1945 年に戦争が終わり、彼の『国力と外国貿易の構造』が出版されたこともあって、1946 年に米国に戻ったハーシュマンはワシントンで仕事を探すことにした。しかし、仕事探しは難航し、なんとか商務省に職を得たが、彼の経済分析の能力からしても適した仕事とはいえなかった。その時に、米国の中央銀行である連邦準備で働いていたガーシェンクロンの耳に、ハーシュマンがワシントンにいたことが入った²⁹⁾。ガーシェンクロンは連邦準備でヨーロッパ経済の分析を行っており、ハーシュマンの分析能力を知っていたので、ハーシュマンは連邦準備でようやく自分の分析能力を生かした職につくことになった。1946 年には次女リサも誕生している。

この時に米国でハーシュマンの就職が大変であったのにはおそらく二つの理由があった。一つは、彼が知らないことであったが、ハーシュマンは共産主義者の疑惑がかかっていたのである。この機密ファイルが彼の政府での就職を邪魔することになった³⁰⁾。もう一つは、ハーシュマンが自覚していた点であるが、『国力と外国貿易の構造』は当時においては全く孤立した研究であった³¹⁾。貿易によって国際関係に影響を与えるという着想は他には全くなく、そして彼が取り上げた実証ケースがナチスであったために、第二次世界大戦の終了後、欧州の経済復興には世の中の関心があってもナチス経済への関心ではなかったために、21 世紀の今日では国際政治経済学の古典としてみなされているもの、彼の分析は当時ほとんど顧みられることはなかったのである。そして、この間に経済学の制度化が進行していき、いわゆる学際的な研究は下火になっていった。

ハーシュマンが連邦準備で最も関わった仕事はマーシャル・プランに関わる欧州経済の調査と

政策立案であった。マーシャル・プランに関わるヨーロッパ経済協力機構 (Economic Cooperation Administration) が発足すると、連邦準備から派遣されてここに加わるようになった³²⁾。そして、次第に彼はサラと一緒に二児を育てながら、フランスへの転勤を希望するようになる。ハーシュマンにとってもサラにとってもパリは人生の重要な時間を過ごした特別な場所だったのだと思われる。この頃には後にイエール大学で一緒にいるトーマス・シェリングやロバート・トリフィンと仕事で交遊を持つようになった。マーシャル・プランが立ちあがると次第に米国政府の欧州への興味は薄れ、ヨーロッパ経済協力機構の機構改革による規模縮小でハーシュマンは意気消沈した。そして、マッカーシズムすなわち赤狩りが始まり、欧州でのハーシュマンのスペイン内戦への従軍を含む経歴が問題にされるようになり、フランスへの転勤は阻まれ、次第に米国政府での勤務も困難になってきた。

ハーシュマンは心機一転、1952年に世界銀行の派遣でコロンビアの首都ボゴタでコロンビア政府の国家計画局の財政顧問に就任した³³⁾。これが開発経済学者アルバート・ハーシュマンの始まり(37歳)である。自らも外国人の経済専門家であるものの、同僚の計画志向に反発を感じながら2年間の勤務を終了した。その後も民間のコンサルタントとしてボゴタで仕事を始め、成功を収めていたという。家族もコロンビア滞在を楽しんでいたようである。しかし、ハーシュマンは米国で経済学者として身を立てたかった³⁴⁾。1954年に開発経済学の会議に出席して論文を発表したが、あまり注目されることはなかった。しかし、2年後の1956年に青天の霹靂でイエール大学経済学部から一年間の研究専門の教授職を提示され、即座に引き受けて米国に戻った。

イエール大学に彼を引っ張ったのはゲーム理論で後にノーベル経済学賞を受けるトーマス・シェリングだったという³⁵⁾。イエール大学では、ハーシュマンは数本の論文を執筆した後、『経済発展の戦略』の執筆に打ち込んだ。元々一年だったイエール大学の契約も若干延長され、1958年に『経済発展の戦略』が出版される。本書の謝辞においてハーシュマンが感謝を示したシェリングは1960年に出版される主著『紛争の戦略』の執筆を当時おこなっていたことを考えれば、「戦略」への両者の共通した高い関心は顕著であった³⁶⁾。コロンビアでの経験をもとに、ハーシュマンは当時の開発経済学で主流であった均整成長(balanced growth)に異を唱え、不均整成長(unbalanced growth)を提唱し、前方と後方への連関効果を提示した。そして、心理学の理論に注目したことも特徴である。彼の思惑通りに『経済発展の戦略』は学界から注目され、1958年にニューヨーク市コロンビア大学の国際経済学教授として迎えられることになった³⁷⁾。ハーシュマン43歳である。

こうして研究と教育を行う大学教授としての1958年から1973年までの16年間(コロンビア大学6年間、ハーバード大学10年間)が始まった。この時期のハーシュマンの研究スタイルの特徴は、中南米諸国の政治経済研究をおこない、財団や外部機関との共同作業が多かったことであろう。ブラジルの北東地域開発、コロンビアでの土地改革、そしてチリでのマクロ経済安定化という三つの改革作業を扱い、1963年に出版した『進歩への旅(Journeys toward Progress)』は20世紀財団の援助を受けた成果であった。世界の発展途上国でのプロジェクトを調査・評価した『開発計画の診断(Development Projects Observed)』(1967年出版)は世界銀行とブルッキングス研究所とカーネギー財団の援助を受けた研究結果であった。これは海外での研究に資金が必要であったことも理由であるが、ハーシュマンが財団や外部研究所との交渉に長けていたことも理由であろう。

教育面でのハーシュマンの特徴は、非常に教えるのが下手だったことである³⁸⁾。これは、コロ

ンビア大学でも、後にガーシェンクロンから声のかかったハーバード大学でも一向に改善せず、そしてハーシュマン自身、教えるのは嫌いで苦痛に感じていたようである。学生たちも退屈な教え方だと感じていたようだ。これには二つの理由がありえよう。第一に、既に述べてきたようにハーシュマンは体系的に経済学を学んでいない。彼は大量の読書をこなし、分析論文を書きながら実地で独学してきた研究者である。その一方、1948年にポール・サミュエルソンによる『経済学』が出版されて以来、経済学は体系化が進んだが、ハーシュマンはそれに適応できなかったとも言えよう³⁹⁾。また、授業では学界で主流とされる理論を紹介していくことが通例であるため、学界での主流（一般理論）に立ち向かう彼の研究スタイルと合わなかったことも想像できる。彼がハーバード時代にもっとも楽しんだ授業はサミュエル・ハンティントンと一緒に運営したMIT＝ハーバード政治発展セミナーであったそうだ。そういうこともあってか、彼にはほとんど弟子がいない。かろうじて弟子と言えるのはコロンビア大学時代のジュディス・テンドラー（現在はMIT教授）だけらしい⁴⁰⁾。

この16年間に彼の開発経済学者としての三部作と言われる『経済発展の戦略』、『進歩への旅』、『開発計画の診断』が執筆され、そして主著の一つとされる『離脱・発言・忠誠』が執筆される。『離脱・発言・忠誠』の執筆のきっかけとしての「小さいアイデア」が『開発計画の診断』から生まれたことはすでに述べた。では、「疑い」は彼の活動にどう影響を与えただろうか。「疑い」は知的な意味で彼が拠って立つ可能性主義（possibilism）の源泉であり、そしてハーシュマンの様々な運動の源泉であったと考えることができる。

『離脱・発言・忠誠』後に書かれ1971年に発表された「政治経済学と可能性主義（Political Economics and Possibilism）」論文では、政治と経済の相互関係と社会変化過程の分析について可能性主義者（possibilist）の立場から素描している。アーデルマンがハーシュマンの最良の論文と考えたこの著作でハーシュマンは、政治と経済が関係しているのは当然であるが、その相互関係を分析するのは難しいと現状を述べ、社会科学は自然科学のように一般理論を求めるだけでなく、ある事象の独自性（uniqueness）を説明することも重要と論じた。そして、将来時点での独自性を追求するためには、我々の可能性の限界を広げることが大事だと論じた。それこそが可能性主義であり、予期せぬ結果（unintended consequences）などの概念を手掛かりに考えて行くことができると主張した。ここで、予期せぬ結果に注目するためには一般理論を知り、その上で根本からの疑いが必要であることに注意しよう。

ハーシュマンは、スペイン内戦への従軍、マルセイユでのユダヤ人知識人の亡命扶助、そして、中南米諸国の軍政下での各国のシンクタンク支援を通じた現地知識人への手助けを積極的におこなった。これはまさにハーシュマンの今後はどうなるかわからない、だからこそ行動しようという「ハムレットが間違っていることを証明する」行動であり、疑いをもちながら楽観的に行動するハーシュマンの面目躍如であった。そこで支援された組織には後のブラジル大統領になるフェルナンド・エンリケ・カルドーゾが属したCEBRAPや、後のチリ財務大臣や外務大臣を歴任したアレハンドロ・フォクスレーが属したCIEPLANがある⁴¹⁾。

1974年にはハーシュマンはプリンストン大学近くのプリンストン高等学術研究所に移籍する⁴²⁾。ここではようやく教育から解放され、研究と研究プロジェクトに打ち込むことになった。中南米地域の権威主義に関する政治経済研究のプロジェクトに関わりながら、ハーシュマンが新しい環境で

専心したのが『情念の政治経済学』に結実する17・18世紀におけるモンテスキューやアダム・スミスなどの政治経済に関わる知識史研究であった⁴³⁾。中南米を中心とする現代政治経済研究から研究の中心を移した理由の一つは1973年のチリにおけるクーデターからのショックであったろう⁴⁴⁾。思想史家クエンティン・スキナーや文化人類学者クリフォード・ギアツと議論しながら執筆した本書では、アダム・スミスの「見えざる手」に表わされる良い均衡に結実する経済中心の資本主義擁護論（「意図せぬ結果」の一例）とは別の政治経済的な資本主義擁護論があったことを主張した。

ハーシュマンは69歳でプリンストン高等学術研究所の名誉教授になるが、その後も書き続ける。なんと『反動のレトリック』を出版した時には76歳であった。1990年代後半の80歳頃からは怪我の後遺症もあり、知的な活動が難しくなったが、亡くなったのは2012年97歳の時であった。

3. 本伝記からわかるハーシュマンの思考プロセスの特徴

アーデルマンが描くハーシュマン研究で特筆すべきは、ハーシュマンの執筆メモにまで調査して書き記したハーシュマンの思考プロセスであろう。その根底にはすでに指摘した二つの軸がある。「小さいアイデア」は、ハーシュマンが一般理論と闘うために利用した発想の契機であった。ナイジェリアの鉄道、そして、モンテスキューが書いた一文がハーシュマンの中で他の事象と結びつき新しい研究を切り開いていった。そして、もう一つの軸である「疑い」を持つことはハーシュマンが研究方法論としての可能性主義を提唱する源泉であり、また「ハムレットが間違っていることを証明しよう」とする行動の源泉でもあった。

ハーシュマンが「小さいアイデア」と「疑い」を大事にするためには、一般理論をよく勉強する必要があった。ハーシュマンは認知的不協和など心理学も学んだが、彼の一般理論の基礎は経済学であった。それはマンサー・オルソン『集合行為論』（1965年）への態度によく現れている。オルソンのフリー・ライダー論に代表される議論を、ハーシュマンは政治プロセスへの経済学理論の応用として位置づけながら、その発刊以来、長年こだわってきた。71年の『離脱・発言・忠誠』でも『政治経済学と可能性主義』でも検討し、79年の高等学術研究所への移籍後もギアツなどと『集合行為論』をめぐる議論を戦わせたという⁴⁵⁾。興味深いのはハーシュマンがオルソンの議論を紹介する側で、ギアツは批判する側であったという指摘である。その意味で、ハーシュマンは経済学者だったのだ。これは『離脱・発言・忠誠』の元となったナイジェリアの鉄道についてハーシュマンはガーシェンクロンと議論し、消費者余剰が関係すると指摘したガーシェンクロンから示唆を受けて粘り強く考え続けたことにも現れている⁴⁶⁾。

では、どこでハーシュマンは経済学を体系的に身につけたのか。彼は、ベルリンでもパリでも経済学教育を受けなかった。ロンドンではラーナーの授業は出たが体系的とまではいかなかった。もちろん、ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』の発表時にロンドンにいたので、購入して読んだという。しかし、評者が想像するに、読書だけでなく嫌々ながらも経済学を教えることで学んだのではないかと考える。もちろん、すでに書いたようにハーシュマンは普遍的な理論を紹介する役目を担う経済学教育が好きではなかった。彼は独自性を追求していたからである。それでも、教えることで経済学を体系的に受容したのとも言えよう⁴⁷⁾。

しかし、ハーシュマンは経済学には飽き足らなかった。それは、政治が経済を圧倒するファシスト政権下のイタリア経済を分析することによって世に立った体験から来るのかもしれないが、ハーシュマンは政治経済学を志向した。そして、経済学の方法論である理論と実証に対して違和感を表明し続けた。後に、『トンネル効果』が有名になる若手経済学者との共同研究では、若手経済学者の担当部分について『これじゃ、すべて証拠じゃないか。』とハーシュマンが叫んだという逸話が紹介されている⁴⁸⁾。証拠から一般理論を証明するという実証手法はハーシュマンの性分ではなかったのである。彼が志向したのは、独自性のある将来を準備するための可能性主義者であり続けることだった。

彼の中南米の政治経済研究が残した足跡は興味深い。現在の中南米を研究する社会科学研究者はハーシュマンの中南米とは直接関係のない『離脱・発言・忠誠』は政治経済学の古典として読んだとしても、開発経済学の異端である『経済発展の戦略』はまず読まないからである。また、『進歩への旅』も読者は少ない。しかし、ハーシュマンの唯一の弟子と目されるジュディス・テンドラーの著作である *Good Government in the Tropics*こそ『進歩への旅』の後継者であり、これは現在でも政治経済学の読書リストに入る古典である⁴⁹⁾。また、現代の中南米研究者は、ハーシュマンが軍政期に支援した CEBRAP、CIEPLAN に在籍した研究者の著作を読む機会は大いにあろうし、政治学者は今でも、ハーシュマンが立ち上げに大きくかかわった *The New Authoritarianism in Latin America* を読む機会はあるかもしれない⁵⁰⁾。その意味では、現代の中南米研究者にとってハーシュマンとは知的空気のような一世代前の研究者なのである。改めて一世代前の研究を読むことによって、もう一度、自らの研究戦略、例えば一般理論を構築するのか、それとも独自性のある事象を解明するのか、などを再考することが可能であろう。

4. おわりに

アーデルマンが執筆したアルバート・O・ハーシュマンの伝記が公刊されたことで、3回の従軍を行い、コロンビア国で自らの開発経済学を独自に打ち立て、その後も旺盛な研究活動をおこなった知的巨人の人生が詳細に明らかになった。同時に、ハーシュマンの知的生産活動の指針も明確になった。その指針は「小さいアイデア」と「疑い」であり、前者から彼の主著二冊が生まれ、後者から彼の知的ビジョンである可能性主義と、中南米諸国の軍政時代に現地シンクタンクを助けた知的支援活動が生まれた。本書を読むことで、ハーシュマンの足跡を辿りながら20世紀を知的に振り返ることもできよう。

アルバート・O・ハーシュマン年譜

年齢	年	事象	関連事象
0	1915	ベルリン生まれ。	ポール・サミュエルソン生まれる
1	1916		ハーバート・サイモン生まれる
2	1917		
3	1918		
4	1919		
5	1920		
6	1921		
7	1922		
8	1923	フレンチ・ギムナジウム入学(9年間在籍)。	
9	1924		
10	1925		
11	1926		
12	1927	パリ訪問。	
13	1928		
14	1929		
15	1930		
16	1931	ヘーゲル『精神現象学』輪読、マルクス『資本論』、『共産党宣言』など読書。コンドラチェフ・サイクルを契機に経済学に関心を持つ。	
17	1932	フレンチ・ギムナジウム卒業試験(1月29日)。ベルリン大学法学部で経済学を学ぶ一年生になる。	
18	1933	父死去(3月31日)。反ナチス運動に参加。パリに出生。	
19	1934	Ecole des hautes études commerciales de Parisに入学。会計や経済地理を学ぶ。	
20	1935	Eugenio Colomiと出会う。夏にイタリアに行つてColomiとの親睦を深める。奨学金を受けてLSEに行く(Abba Lerner, P. Barrett, Whaleの授業を受ける)。	
21	1936	6月パリにもどる。カタロニア従軍(7月—10月末)。その後、トリエステに。	2月ケインズ『一般理論』出版。
22	1937	イタリアの人口や経済について学び論文を書く。	
23	1938	トリエステ大学で博士号を得る。フランスにもどる。	
24	1939	ソルボンヌ大学の経済社会研究所の経済研究雑誌に執筆。	
25	1940	フランス従軍。敗戦、逃亡、マルセイユで亡命の支援。	
26	1941	ロックフェラー財団の奨学金でアメリカ合衆国に行く。サラと結婚。	
27	1942	『国力と外国貿易の構造』草稿を書きあげる。2月に陸軍に志願。	
28	1943	4月30日に陸軍に入隊(サンフランシスコ)。語学力が買われ、OSSへ。	
29	1944	2月にヨーロッパへ移動。イタリアへ、裁判の通訳。長女カティア10月に誕生。	
30	1945	最初の著書『国力と外国貿易の構造』を出版。	
31	1946	ワシントンで仕事探し。最初は商務省。10月にガーシェンクロンの目に留まり、Fedへ。次女リサ誕生。	
32	1947		マーシャル演説
33	1948	西ヨーロッパ大英連邦のチーフになる。ECAにFedから貸出。	サミュエルソン『経済学』を出版、経済協力局と欧州経済協力機構の設立
34	1949		
35	1950	ECAのオーバーホールで意気消沈。	
36	1951		
37	1952	コロンビアのボゴタにある国家計画局の財政顧問となる。	ガーシェンクロンの後発性ペーパー発表。
38	1953		
39	1954	私的な経済コンサルタントとしてコロンビアに留まる。開発経済学の会議に出席した。	
40	1955		
41	1956	イェール大学のリサーチ教授になる。	
42	1957		
43	1958	『経済発展の戦略』を出版。ランド研究所でリンドブロムと共同研究。コロンビア大学の国際経済学教授として初めて教える。	
44	1959	『進歩への旅』に結実する研究会発足。	
45	1960		
46	1961	Latin American Issues出版。61—62サバティカル。	
47	1962		
48	1963	『進歩への旅』出版。ハーバードで授業の招待。オファーに即断。	
49	1964	ハーヴァード大学の政治経済学教授となる。『開発計画の診断』(1967)になる研究開始。初年度サバティカルで1—10月は中南米、11—3月は南アジア、タイ。	
50	1965	南アジア、タイ、そしてアフリカ。	マンサー・オルソン『集合行為論』出版
51	1966	ボストンに移動。	バリントン・ムーア『独裁と民主政治の社会的起源』出版。
52	1967	『開発計画の診断』出版。	
53	1968	サバティカルでスタンフォードへ(68—69)。年末には『離脱・発言・忠誠』の骨格できる。	
54	1969		学生運動
55	1970	『離脱・発言・忠誠』の出版。『政治経済学と可能性主義』の執筆。	
56	1971	A Bias for Hopeの出版。ラテンアメリカ歴訪(オドネルを連れてCEBRAPをレビュー)。IAS客員フェローを打診。	
57	1972	IAS客員フェロー(72—73)	ニクソン再選。
58	1973	トンネル効果のペーパー出版。11月にNew Authoritarianismになる研究プロジェクトスタート。	チリでクーデター。
59	1974	プリンストン大学近くのプリンストン高等研究所の経済学教授となる(後に名誉教授)。ベルリン訪問。	スキナーIASに74—77滞在。
60	1975	夏はアマルティア・センとの対話。	
61	1976	中南米遠征(ブラジルでカルドーゾと同席、内地を旅行)。	
62	1977	『情念の政治経済学』出版。	
63	1978	夏はパリ。ラトガーズ大学より名誉学位を受ける(最初の名誉博士号)。	ハーバート・サイモン、ノーベル経済学賞受賞。
64	1979		アーサー・ルイス、ノーベル経済学賞受賞。
65	1980	『国力と外国貿易の構造』の再刊。	
66	1981		
67	1982	『失望と参画の現象学』出版。	
68	1983	『連帯経済の可能性』用の14週間旅行。タルコット・パーソンズ賞。	
69	1984	『連帯経済の可能性』出版。名誉教授になる。第一回Festschrift。	
70	1985	ラテンアメリカ旅行。	
71	1986	南カリフォルニア大学名誉博士号授与。	
72	1987		
73	1988	第二回Festschrift	
74	1989	アトランティックにエッセイ掲載。ハンガリー旅行。	
75	1990	ベルリン滞在。チリ大統領就任式に参列。	
76	1991	『反動のレトリック』出版。	
77	1992		
78	1993		
79	1994	カルドーゾ大統領就任式に参列。	
80	1995	バネルやセミナー開催。『方法としての自己破壊』が出版。	
81	1996	ウィーンで講演後、山で大けが。	
82	1997	マーシャル・プラン50周年イベントにエッセイ執筆。	
83	1998	リサ死去。	
84	1999		
85	2000	本書の為にインタビュー実施。	
86	2001		
87	2002		
88	2003		
89	2004		
90	2005		
91	2006		
92	2007		
93	2008		
94	2009		
95	2010		
96	2011	サラが癌と診断され、死去。	
97	2012	12月11日、ハーシュマン97歳で没。	

出所：筆者作成。

謝辞：本稿の草稿に対して受田宏之氏から寄せられたコメントに感謝する。もちろん、本稿に関する誤りの責任は筆者が負うものである。

〔注〕

- 1) Jeremy Adelman, *Worldly Philosopher: The Odyssey of Albert O. Hirschman*, (Princeton University Press, 2013).
- 2) 同書 p.xiv. なお、ハイルブローナーの著作の原題は *World Philosophers* と複数形になっている。
- 3) 同書 p.187.
- 4) 同書 p.66.
- 5) 同書 p.55.
- 6) 同書 p.76.
- 7) 同書 p.89.
- 8) 同書 p.91.
- 9) 同書 p.108.
- 10) 同書 p.115.
- 11) 同書 p.116.
- 12) 同書 p.117.
- 13) 同書 p.118.
- 14) 同書 p.121.
- 15) 同書 p.122.
- 16) 同書 p.123.
- 17) 同書 p.131.
- 18) 同書 p.143.
- 19) 同書 p.162.
- 20) 同書 p.171.
- 21) ルイス・A・コーザー『亡命知識人とアメリカーその影響とその経験―』（岩波書店、1988年）pp.175-188。
- 22) Adelman, p.182.
- 23) 同書 p.187.
- 24) 同書 p.189.
- 25) 同書 p.205.
- 26) 同書 p.191.
- 27) 同書 p.219.
- 28) 同書 p.245.
- 29) 同書 p.257.
- 30) 同書 pp.284-294. 第9章
- 31) 同書 p.328.
- 32) 同書 p.265.
- 33) 同書 p.295.
- 34) 同書 p.325.

- 35) 同書 p.326.
- 36) 同書 p.332.
- 37) 同書 p.362.
- 38) 同書 p.363.
- 39) このことはハーシュマンが数学モデルを嫌っていたということではない。逆に、ハーシュマンは『経済発展の戦略』を数学モデル化しようと試みたらしい。同書 p.359.
- 40) 同書 p.365.
- 41) 同書 p.467, 487. なお、本書の p.483 に書かれているハーシュマンとの交遊をカルドーゾ側から見ることもできる。Fernando Henrique Cardoso, *The Accidental President of Brazil* (Public Affairs, 2006) pp.125-127.
- 42) Adelman, p.493.
- 43) 同書 p.480. 共同研究は David Collier ed. *The New Authoritarianism in Latin America* (Princeton University Press, 1980) に結実した。
- 44) 同書 p.502.
- 45) 同書 p.533.
- 46) 同書 p.423.
- 47) 彼が数学モデルを嫌っていたという事実はない。『経済発展の戦略』の数学モデル化も試みたことがあるし、彼の論文には共同研究者の数学付録がついているものがある。
- 48) 同書 p.460.
- 49) Judith Tendler, *Good Government in the Tropics* (John Hopkins University Press, 1997).
- 50) 注 43 を参照。